
さざめく時間

伽砂杜ともみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さざめく時間

【Zコード】

Z2785F

【作者名】

伽砂杜ともみ

【あらすじ】

海斗、葉、桜のどたばた三人組に、カメラマン志望の真樹も加わって、地区の盆踊りへとくり出した。そこで巻き起こる、出来事とは…… 時間シリーズ 第四弾です。

昼間のうだるような暑さは、陽が暮れさえすれば、涼しい風が熱気を押しやっていく。

陽は沈んだが、遠くの山筋はまだうすらと光が残り、名残惜しきもある。

そのわずかな光をも追い出していく紺とも黒ともつかない深い色が、覆いかぶさるように勢いを増していた。

遠くから、ドンドンと低く響き渡る太鼓の音が聞こえてくる。

小学校の校庭で行われている、地区の盆踊り。

おおっぴらに夜遊びが出来るとあって、中学にあがつたばかりの今年とて、出かけないわけにはいかない気分にさせる。

鈴木海斗は、はやる気持ちを押さえながら、玄関に腰をおろして、くつをはいた。

「ちょっと待って。海斗、お母さんの携帯貸してあげるから、万が一何かあつたら連絡しなさいよ」

「はあ？ 大丈夫だつて、小学校の校庭なんだからさ」

スリッパをパタパタいわせ、薄いピンク色の携帯電話を差し出してきた母に、海斗はあきれたように声をあげた。

いくら暗いからといって、小学校から家まで、そんなに離れているわけじゃない。

玄関を開けると、太鼓の音や音楽が住む反射して、さらに気持ちをはやらせる。

飛び出してこいつとすみ海斗のズボンについているポケットをつかんで、母は携帯を強引に押しこんだ。

「ちょっと！ いいつて言つてるじゃんか、いらぬ一つで！」

「いいのー。最近物騒なんだから、お母さんが安心するために持つて行きなさい」

「……ボクのためじゃなくて？」

「そうよ。この家にいつしょに住んでる以上、心配させない努力を見せて」「じりと」

「はあ？ 携帯持つてるだけで、安心？」

母は、腕を組んでふんぞり返り、そつよ。と大きくうなずいた。
目を丸くしながらも、海斗は小ちく息を吐いて、口をとがらせる。

「わかつたよ」

「いい？ なにかあって、家にかけたときせ、居場所を一言で大き

く叫びなさい」

「あーはーはー」

「……返事は一回！」

母の目が変わったのを見て、海斗は家を飛び出した。

海斗の家の門柱に、ヒラ口長い体を預けた、短髪で柔らかそうな
髪質の幼馴染の少年、佐々木葉が海斗を見つけ、タレ目を細めた。

「遅い！」

「ごめんって！ お母さんがさー、いらないって言つてるのに、携
帯押しつけてきたんだよ」

真ん中で分けた前髪をさわり、口をとがらせる海斗に、葉が目を
輝かせる。

「え、いいじゃん。携帯

「よくねーって。だつてピンクだぜ？」

後ろポケットから取り出して見せてやると、葉は軽く笑つた。

「暗くなれば色なんて分からなくなるんだから、いいじゃん何色で

も」

「でもやー、あってもネットにつなげられないから、電話かメール
くらいしか出来ないんだぜ？」

「なんだ、つまんねーの。じゃあ陸兄にでも、イタズラメールす
か」

「……だれが怒られると思つてゐるんだよ」

低い声でうなり、携帯をポケットへと戻す海斗に、葉は楽しそうに笑つたが、その笑いが途切れるほど衝撃が葉の背中をおさう。

「あつぶねーな！ 息止まつただろー！」

葉がたたらを踏んで、地面と仲良しすることを、なんとか踏みとどまつた。

顔を真つ赤にして怒りの声をあげながら、葉は振り返る。おもわず一人は息をのんだ。

視線の先には、見慣れない浴衣姿をしている一人の女子。長い黒髪を高い位置で結い大きな花飾りをつけ、淡い水色地に桜の大きな模様が綺麗な浴衣。

それを着ているのは、いたずらっぽい笑みを浮かべた少女、日下桜。

そして、紺地に白とピンクで描かれた蝶の浴衣で、同じく黒髪を右耳の後ろでおだんじにし、少しばかり目を丸くしてデジカメを握りしめてくる少女、南川真樹。

「なによ、盆踊りつていつたら浴衣でしょ？ 男子はもうちょっと空氣読んでくれないとセーー」

「あ、あの、ごめんね？ 小学校でやる小さな地区のお祭なんだけど……どうしても、私が桜の浴衣姿が見たかったから、遅くなっちゃつた」

困つたように上田づかい、「デジカメを握る手に力をこめる真樹。葉が痛む背中を気にしながら、それでもにやりと笑つた。

「へーー！ これ、なんて言うんだつけ、マゴニモイシヨウ？」

「……絶対、言つと思つた。あなたたちも祭に合づ衣装くらい着てきたり？」

「男はあんま持つてないんじゃね？ なあ、海斗」

ぼんやりとしている海斗へと振り返り、葉は盛大にため息を吐い

た。

細く長い指で海斗の肩をつかみ、前後に揺さぶる。

「戻つてこーい！」

「や、やめるよ… なんともねーよ」

「つたく。じゃあ、ほら！ 待つててやるから、なんか言えよ」

「え！ ……グッジョブ？」

薄暗い道には四人しかおらず、海斗の言葉により、さらに静まり返った住宅街。

その雰囲気に耐えきれず、葉は大きな笑い声をあげた。

「おっまえ、誰にたいしてだよ！」

「な、なにも変なこと言つてないだろ？」

「海斗のそーゆーとこ。勝てないわよねー」

桜も少しあきれた声を出しながら笑う。

いよいよ頬をふくらませて、前髪を触りながら早足で笑いの輪から抜け出す海斗。

ちょっと待てよ。と、誰かのモノマネのマネをしながら追いかけてきた葉は、後ろから海斗を突き飛ばす。

「海斗くーん。ジユース……いや、ダンゴ一本おじってやるから、そーすねるなつて！」

「ジユースじやねーのかよ」

「高いじやん。ダンゴなら百円もしないし」

しつと言つ葉に、思わず吹き出した海斗は、右手をにぎり葉の頬に当ててから押す。

吹き飛ぶマネをする葉に、明るい笑い声が住宅街に反射した。

薄暗い元桜並木の細い通りを抜け、音と光に包まれた小学校に四人は足を踏み入れる。

「へー。けつこう本格的なのね」

「まあ、町内会とかで、色々やつてるみたいだから、知つてゐるおじ

さんとか売り子でいるんじゃないかな

「へー」

「ついこの間、卒業したばかりなのに。なんかすっげー懐かしい気

分」

葉の説明に、桜は嬉しそうに見回しながら、やぐらを中心に盆踊りをしている人々をながめていた。

海斗も同じように辺りを見回していたが、思に出したよつて声をあげる。

「そうだ、ジユースくらこおむねばだ。なにがいい?」

「え? 悪いよ、そんなの」

「いや、お母さんがわー。ジユースくらこ出してあげなさいって、お金くれたんだよね」

そんな海斗の言葉に田を輝かせたのは、葉だった。

「いやー。やすがゆかりさん! 優しいよねー」

「……あのさ。女子限定なんだけど」

ゆかりといふのは、海斗の母の名前である。海斗の言葉に打ちひしがれたように、葉はその場にぐずれ落ちた。

海斗は笑いながら、とどめをさす。

「葉はボクにダンゴおじつてくれよ」

「なんでだよ! いやだね。絶対いやだ! だれが出するもんか!」

「葉がボクにダンゴおじつてくれるって言つたの、聞いた人ー」

率先して手を上げた海斗に、桜もいたずらっぽい笑顔を浮かべて手を上げる。

葉がすがるように向けた視線の先には、困った顔の真樹が小さく手を上げていた。

がつくと肩を落とした葉は、わかったよ。とつぶやく。
勢いよく胸を張り、一つの露天を指差した。

「わかった! ボクも男だ。あれで勝負して勝つたら、おじつてる」

「……ぜんぜん男らしくないよね」

細い目をさらに細めて、桜がはつきりと口にした。
しかし葉が大きく腕を振り上げ、指さした先には『一 一 風船す
くい』。

『勝負』といつ言葉に誘われて、海斗も桜も色とりどりの風船に
目を向ける。

「よしー。葉、ボクが勝つたらジユースだからな
「ダンゴだら！」

「ジユースにしようよ。そのほうが絶対面白いって！」

桜が一声上げ、真樹の手を引っ張り、下駄を鳴らして店番してい
るおじさんに声をかけた。

タレ目を細め、口をとがらせた葉は、足取りが重い。

「なんか、すっげーはめられた気分」

「なんだよ。自分で言つたんじやん」

面白そうに笑う海斗に、深く息を吐く葉。

かくして、『一 一 風船すくい』合戦の幕が切って落とされた。

桜、海斗、葉の順に三人並び、真樹はおじさんの隣に座らせても
らってカメラをかまえた。

真樹が右手を上げて、楽しそうに振り下ろす。

それを口火として、三人は水に揺れる風船へと目をおとした。
姿勢を低くしたり、上からカメラを向けて撮りまくる真樹に、集
中をそがれながらも、まっさきに歓声をあげたのは、意外や海斗で
あつた。

「つしゃー。かかつた！」

一人の真剣な視線が海斗に向けられ、風船を釣り上げようとした
海斗を、葉が左手で桜のほうに突き飛ばした。

悲鳴をあげる一人に、葉がにやりと笑う。

「うわー！『めん桜』って、あーもー切れたじゃねーかー。なに

すんだよ葉、それはずるいだろ！」

「そーよ、私まで被害受けちゃつたじゃない！」

二人とも切れた紙キレをにぎりしめ、葉に非難の声を浴びせかけた。

笑いながら舌を出す葉。

「勝負ってのはな、そりやあ厳しいもんなんだといつこと、身をもつて知りたまえよ」

「なーにが、知りたまえーよ。絶対邪魔してやるからね。覚悟しきなさいよ！」

海斗は桜のその細い目に、怒りの炎を見た。

「桜。場所変わらうか？」

「ダメだ。最初の場所を変えるなど、ルールに反する」

「……いつそんなルール決めたんだよ」

しかし、先にそう言われてしまつと、なんとなく場所を変わりづらい。

海斗は口をとがらせて、しぶしぶ一本目を慎重に構えた。

「いえ～！　とれた……つて、おわ！」
「いてーっ！」

葉が風船を釣り上げた瞬間、海斗爆弾をモロにうけ、二人で地面に転がつた。

突き飛ばしたのは、もちろん桜。

うめきながら一人が起き上がり、地面に転がつた土まみれの緑色の風船を葉は手にした。

「おじさん、外に転がればボクのだよね？」

「ああ、そうだね。つて、君たちケガだけはしないでくれよ？」「だ、大丈夫」

葉は嬉々として緑風船をかかげ、フラッシュを浴びていた。

おじさんに苦笑いを浮かべながら返事をし、なんだか真ん中はとても不利だと気がついた海斗。一本目のリボンも切れてしまつてい

た。

「一個ゲートー！」

『はあ！？』

桜の言葉に、一人があんぐりと口を開けて振り返った。

一本のリボンに、ピンクと紫色の風船が仲良くついている。
フラッシュが桜へと移動し、勝ち誇った顔の桜はピースサインで
ファインダーに納まっていた。

「それって、するくね！」

「なによ。するなんてしてないよねー？ おじさん」

「すごいねー！ 初めて見たよー！」

真樹が歓声をあげ、上機嫌ではははと笑う桜に葉が文句をつけながら、切れた1本目のリボンをおじさんに返した。

「絶対負けねー！」

「あのせ、もうボク押すのやめよーよ。ラスト一本になっちゃった
しさー！」

切れた一本目を手に、海斗が口をとがらせ提案したが、二人はき

ょとんとした顔で、

「え？ 一本はねてるけど、私はまだ一本あるよ~。
「ボクもサラのが一本ある」

「……おまえら、隣同士でやれよ」

しぼり出すような低い声に、葉も桜も吹き出した。

「『めんつて！ じゃあ真剣勝負してやるからやー！
「遅いだろ！ もう勝負にもならないじゃんか！』

口をとがらせて、前髪を触る。

葉はそれでも首を横に振った。

「なに言つてるんだよ。桜は一本で一個も取れたんだぜ？ がんば

れば三個いけるかもしないだろ」

「そんなの、見たことないよ」

海斗が口をとがらせたまま、それでも水の中へと視線を落とした。気持ち良さそうな水の動きに、風船がただよい、持ち手のゴム部分は底のほうで揺らめいていた。

「無理だつて」

「最初から決めつけるから、出来るもんも出来なくなるんだぜー。」「どこからの受け売りだよ」

海斗はあきれた声と表情で葉を見るが、葉はいたつて真剣な顔をしていた。

大きく息を吐き出した海斗に、桜が吹き出した。

前髪をさわりながら、紙リボンをゆっくつと水につけ、じいじやまとばかりに引き上げれば、そこには針金すらついていなかつた。

とたんに静まり返る四人。

とりあえず、とばかりに葉と桜がなぐさめるように海斗の肩を軽くたたいた。

彼はそれを、うるわしつに振り払つたが。

「やつた！ 全部で三個ね」

「よつしやー ひーの、ふーの……三つか」

一人の楽しそうな言葉を尻目に、海斗は残念賞としておじさんから白い風船を一つ受け取つた。

無言で立ち上がり、一人も舌打ちをしつつ立ち上がる。「葉が海斗をぶつけてこなきや、勝つてたのに」

「なんだよ。負け惜しみは女らしくねーぞ」

「負けてないじゃん、同点でしょー！」

一人のさわき立てる声を背中で受け止めながら、海斗は小走りくつぶやいた。

「……なんだよ。被害者はこっちだつての」

だれも聞いてないと思つたのだが、小走りに追いついていた真

樹がシャツターをきりながら、くすりと笑う。

きつとひどい顔をしていたに違いない。海斗は少しだけ顔を赤くして、口をとがらせた。

「それで？ 真樹は、なにが飲みたいんだよ

「え！ いいよ、おごづかい持つてきたから」「だつてボク負けたし。特別資金もあるしさ」

その言葉に、後ろから声がかけられる。

「じゃあボク、あれでいいや。抹茶入り玉露茶」「ねーよ。つてか、葉には絶対おごらねー」

「なんでだよ！ 海斗負けたるー？」

「そうだ。それはだれのせいだよ」

田を細めて口をとがらせた海斗に、葉が舌を出す。

「でもさ、ラスト一本であれなら、海斗の負けは決定じゃね？」

「残念ながら、私もそう思つ」

桜までうなずき、真樹にも救いを求める田を向ければ、そろされた。

うなるように、わかつたよと言つ海斗に、葉が声をあげて笑つた。

「ダンゴならおごつてやるからさ」

「じゃあ私も、ダンゴおごつたげる」

葉と桜の言葉に、真樹もおそるおそる声をかけてくる。

「それくらいなら、私も出せるよ」

「……そんなにダンゴばっかり、いらなーから」「じゃあナシで」

「葉にはおごつてもらつからな」

念を押す海斗に、葉があさつての方向を見る。

その時、桜が前方から来る人物に気がついた。

「ねえ、あれって、生徒会長じゃない？」

彼女が指した先には、甚平を着た二人の少年が、一ひらへと歩いてきていた。

「あれ！ 女連れとは、なかなかやるじゃないか。ダブルデートかよ」

「違います」

海斗と葉が口を挟む隙もないほど、素早く否定した真樹。口を開きかけていた二人は、真樹を見ながらあんぐりと口を開けはなした。

藤本会長の横にいるのは、河合副会長だ。

「会長と副会長が、どうしたんですか？ 小学校つて、違う地区ですかよね？」

「まあそりゃなんだけど、中学はこの辺の人も通つてるからね、一応顔を出しこくるんだよ」

「ヨソの学区から来て、暴れるやつも時々いるしね。ウチの中学生じゃない事の確認かな」

つけ足すように、河合副会長が説明する。

本当は、ただの祭好きじゃねーの。という葉のつぶやきに、一人は笑つた。

「まあ祭は大好きだからな」

「とにかく、今日は終わるまでいるから。何かあつたら報告してくれよ」

『はーい』

四人のハーモニーにまた笑い、甚平姿を真樹のカメラに収めてから、彼らは人ごみに姿を消した。

「……生徒会長様ともなると、大変なんだなー」

「いや、あれば口実だと思うね。受験の息抜きってヤツだな」海斗が感心する声を出せば、葉が横に首を振る。

そこで桜は、気付きたくもないことに気付いてしまった。

「……早くジュース買ひに行こつよ」

「え、いいけど。どうしたんだよ、なにあせつてるんだ？」

海斗が、桜が素早く田をそらした先に顔を向けようと/orして、桜に両手ではさまれ、横を向けさせられた。

「いててつー！」

「いいから！ 早くいこつー！」

尋常ではない剣幕に、足早にその場を離れる前に、背後から声をかけられる。

振り返れば、知らない少年たち。

「だれ？ だれかの知り合い？」

海斗の間の抜けた問いかけに、六人の少年たちは無遠慮に笑う。さすがにここまでくれば、四人は状況を把握していた。

「……すげ。これってインネンつけられてるってやつ？」

「この地区の人間じゃないよなー」

「そりゃそーよ。」近所さんにこんなこと知られたら、恥ずかしいじゃない

怯える表情を見せたのは真樹だけで、三人のなんとも外れな会話に、六人の態度が変わった。

「おい、おまえら。女をオレらにもわけてくれよ

「私、物じやないから」

「そうだよな。わかるって言つたって、人間をわけるのって難しいんじやね？」

きつぱりと断る桜に、あくまでとぼけた顔を崩さず言つてのける海斗。

しかし、六人はあからさまに敵意をあきらかにした。

ただケンカをふっかけたかつただけなのだろう。きつかけはなんだつていいのだ。

「はーい、そこまで。悪いけど、ウチのシマでーーゆーの。やめてくれるかな」

「人数で押せば、なんとかなると思うなよ」

四人の後ろから、聞き覚えのある といつよりも、さきほど別れたばかりの藤本と河合がいた。

同じ人数になつたとはいえ、海斗たちのほうは女子が一人いるのだ。

形勢は不利なまま。

「うつせーよ、関係ないやつはひつこんでろ!」

「関係? 大アリに決まってるじゃないか。オレは生徒会長をやっている。こいつらは大事な部下なものだね」
だれが部下なんだよ。と言いかけた葉は、海斗たちに押さえ込まれた。

少年の一人が、嫌な笑い方をしながら、

「へえ、生徒会長がケンカだつてよ。ちくつてやるーぜ」
と言えば、仲間たちが下品に笑う。

それを聞いても涼しい顔の藤本。

河合が眼鏡ごしに、六人を見て口の端を持ち上げた。

「素行の悪いやつらの言葉と、生徒会長の言葉。大人はどうちを信じるだろ?」

「そういうことだ。だが、なにが不満だったのか、聞いてやらないこともないぞ? 言つてみろ!」

胸を張つたままの藤本が言えば、六人は少し怯んだ。

四人は、ハラハラとなりゆきを見届ける。

なかなか言い返してこない六人に、海斗が手をあげた。

「さつき、女をわけるとかつて言われたけど」

「女連れが気に入らなかつたのか、うらやましーのか。どっちかだよな」

葉もうなずきながら発言する。

「女子を誘うことが出来なくて、男ばかりでさびしかつたとか?」

冷たい目で六人をにらみつけながら、桜は痛い所をつついてしま

つたらしい。

六人の表情がこわばり、また怒りの雰囲気があたりを包む。

藤本がため息を吐き、両方を制した。

「まあ、両方の言い分はわかった。両方ともペナルティだ。言い方をもつと勉強しろ」

「今日のペナルティは、なににするんだ?」

河合が楽しそうに言葉をかければ、藤本は切れ長の目をキラリと光らせた。

葉と海斗は、一歩あとずさる。

彼のあの表情は、良くないまえぶれだ。

「そうだな。女子のキス争奪、祭合戦なんてどうだ?」

「なんだそれ!」

六人のうちの一人から、あきれた声があがる。しかし、色めきたつてはいた。

四人がわは、どん引いていたが。

「結論。女の取り合いだろう? むだにケンカして、警備のやつに捕まるのも気に入らないし。良い案だと思つけど?」

「どこがですか!」

「迷惑です!」

真樹と桜の憤慨に、藤本は顔を寄せた。

「元はといえば、たしかにあいつらが悪い。だけど、あおるような発言をしたのも良くないだろう? イヤなら、勝て。別に女子が参加しちゃダメだ、なんてルールはない」

「大丈夫だよ。いざとなれば、身をていしてでも……」

「守ってくれるとでも、言つんですか?」

細い目をさらに細めた桜が河合に詰め寄れば、彼は警備のほうへ視線をやつた。

「警備に連絡するからさ」

「実際、オレらもケンカなんて野蛮なもの、した事ないしな」

藤本のセリフに、河合が思わずといった調子で吹き出した。

話を流されたように感じた桜だったが、いまさら否定も出来ず、

高らかに参加表明した。

男どもが、ざわめく。

だが、桜は頑としてひかなかつた。

「当たり前でしょ！ それに、こんなルール不公平すぎるわ。私たちが勝つたら、あんたたち六人でキスしなさいよ」

「ああ？ ふざけんなよ？」

「ふざけてるのは、どっちよ」

「ストップ！」

そっぽを向いた藤本に変わり、ため息を吐きながら河合が一人を止めた。

「いいかい？ 儲ゲームはどっちもある。女子はキスだけど…… そうだな、そっちが負けたら。なにしてくれるんだい？」

「キスくらいの衝撃は欲しいわよね」

桜の言葉に、少年たちは顔を見合させ、その中でも長身の少年が口を開いた。

「おまえらが勝手に決めただけだろ。オレらがそれに付き合う理由なんかねーよ」

彼の言葉に、他の少年たちは口々に、そうだそうだとわめき始める。

藤本は、やつと氣付いたかとばかりに、心の中でこいつそり舌を出した。

「じゃあ、問題起こすなよ。後輩の面倒くらい、ちゃんと見てくれよな？」 吉野

その言葉を発するや、彼らに沈黙がおりた。一人、また一人と背後を振り返る。

残った吉野と呼ばれた長身の少年は、ぱつが悪そつに顎を無造作に搔いた。

「悪かつたつて。手が出る前には止めてたって
「先輩、知り合いつすか？」

驚きに満ちた視線に、苦笑いをしながら吉野はうなずく。

「まあ、よく悪さをしてた友達だよ。あいつにだけはケンカふつか
けるなよ。返り討ちにあつぞ」

息を呑む音は、敵味方関係なかつた。

盆踊りの軽快な太鼓の音や熱気が、辺りを包む。

信じられない者を見る目つきで、海斗たちも藤本を眺めれば、学生服を着ていた時は華奢に見えていたその体も、よく見れば甚平から見えている範囲の胸は確かに筋肉質である。

「藤本先輩つて、ケンカ強いんだ」

真樹の感嘆する声に我に返り、桜がかみついた。

「だつたら、勝負とか言つ前になんとかしてくれればよかつたのに
！」

藤本は言い返すことなく、ただ小さく肩をすくめた。

「桜、そう言つなつて。先輩は生徒会長だから、下手なこと出来ないんだよ。きっと」

その海斗の言葉が気に入つたばかりに、頭をなでてやれば、嫌そうに振り払われた。

仕方なく吉野を含めた六人に向き、にやりと笑う。

「おまえたち、見たところ一年だらう？」

「……それが、なんだよ」

「そんなに勝負に勝ちたいんだつたらな、生徒会長になれー」

「そりゃ話が飛びすぎじゃね？」

こいつの間に買ってきたのか、話に参加した葉の手には、お茶のペ

ツトボトルがにぎられていた。

「そんなことはないぞ。オレはケンカで勝負つけても無駄だと知つた。井の中の蛙だ。勝つたところで、小さな世界の中の小さい男で終わるだろ？ 見てみろ。内申も問題なく、教師からも信頼される。このオレが、だぞ？」

姿勢を正し、胸を張りながら言う彼に、吉田は感心した声を出す。あきれたようにため息を吐いたのは、海斗を含めた四人組だけだったが。

口をとがらせて、少年の一人が声をあげた。

「オレらが、そんなもんになれるわけないじゃねーか」

「立候補してもない奴が吠えるな。立候補することに意味がある。今年がダメでも、来年だ。どんな役職であれ生徒会に入りさえすれば、安泰だろ？」

「もしくは、そんなにも腕に自信があるのなら、風紀委員に立候補すればいい。生徒会と同じく印象は良くなる」

付け足した河合の言葉にも、まだ納得がいかないという風に無言で目配せしあつている。

吉田は、みんなの様子にただ首をすくめただけだった。

海斗は葉を見た。葉も海斗を見てうなずいた。

そうだ。これが先輩たちの真骨頂。秘技、丸め込みの術。

海斗たちの、その無駄な目配せを見て、桜と真樹も視線を合わせた。

そして二人同時に、盛大なため息を吐く。

男つて、無意味なことに情熱を燃やすよね。ヒ。

「大人に逆らってばかりいるのが主張だと、勘違いするなよ？ 認められた奴が、大人と対等に渡り合える発言が出来るんだ。ちなみに

に、この一人も生徒会候補だからな

『……はあ？』

藤本の右腕には海斗。左腕には葉が逃げられないように捕獲される。

とうとつな彼の言葉に、そんな話、聞いたことがないと、二人とも耳を疑った。

もがいても抜けるどころか、しめつけてくる腕に、海斗と葉はそのままの状態で目を見合わせる。

一年の生徒会役員は、もちろん海斗たちではない。
実績もなにもない一人が、生徒会長だなんて考えられないし、やりたくもない。

初耳中の初耳に、葉がうめいた。

「ボクたちがなれるわけ、ないじやないか」

「それはどうかな？ オレが無駄に今の地位であぐらをかいているだけだと思うのか？ 使えるものは、なんだって使うさ。たとえオレたちが卒業してもな」

不敵に笑う藤本に、海斗はその腕から逃れることをあきらめて、口をとがらせた。

「……いやあの。別にそんな地位、ボクはいらないし
まったく乗り気ではない海斗と葉に、藤本は一人にしか聞こえないように顔を寄せた。

「ばかか、おまえら。生徒会ともなれば、女の子からもてはやされるわ、差し入れとか告白とか、日常茶飯事だぞ？」

葉の顔が、真剣みを帯びる。

「しかもだ。そんな状態で、自分に好きな女がいれば……落とすの

なんて、簡単だらうな

海斗はおもわず、桜へと目をやつた。

その意味がわからず、桜は小さく首をかしげる。彼女がわかつた

「」といえど、またなにか吹き込まれてゐるな。とこ、「」といへり。

一人から抵抗する力がゆるむを感じ、腕をはずす。藤本は勝ち誇つた顔で吉田を含めた六人を指差した。

「ど、いうわけで。おまえたちも、三年になるまでに生徒会役員になつてゐるように」

「ばか言つなつて！ わけわかんねーよ、おまえら！」

尻込みをしあげた彼らに、藤本がつまらなさうに皿を繙める。

「……なんだ、やっぱり見かけ倒しか。一校合同の文化祭なんて出来たら面白いと思つたのに」

「じゃあ、ボクたちを巻き込まないで、部長たちがやつてくださいよ」

「一度やれば、また来年も。となるだろ？ その時に、事情を知つてる人間が先に手を組んでいれば、この上なく乐じやないか」

けたたましく鳴る音楽が、同じ向きに流れていぐ人の群れが、藤本と河合以外の心をさかなる。

一番最初に声を出す勇氣を得たのは、桜だった。

「……あのや、これ以上めんどくさいことになる前に、帰つてくれないかな？ うつん。お祭りに参加してもいいから、私たちの前から早急に立ち去ることをすすめたいんだけど」

その言葉に我に返つた吉野をのぞく五人は、悪態をつくることなく足早にきびすを返した。

小さくため息を吐き、吉野が苦笑いをする。

「変わつてねーな、おまえら」

「そつか？ 吉野も、こんなにも近くに引つ越すくらくなら、」ひたちの学区に通えばよかつたのにな

「ばか言つなよ。おまえらとつむのは、疲れぬ」

「そうだね。オレも時々そう思つ時があるけど。まあ、樂しいよ？」

「ちょっと待て！なんか、オレばっかり悪者になつてないか？それより、吉野はどこの高校希望なんだよ……」

三人が仲良く言い争つてゐる間に、海斗たちははいちゃおう小走り声をかけ、その場を離れた。

とりあえず乾いたのどをうるおすために、飲み物屋を探せば、さきほどの五人とはちあわせる。

しかし、おたがい引きつった顔で笑顔をかわし、言葉をかわすことなく田舎での飲み物を購入して立ち去つた。

「なんかさー。お祭りつて気分じゃなくなつちやつたね」

そう桜がため息混じりにつぶやけば、みんなは無言でうなづく。それでもみたらし団子を買って、部長たちがいるはずの場所とは逆の端に寄れば、またしても五人組と顔を合わせた。

「なんか、けつきょく考へることは同じなんだね」

「違ひないな」

真樹の苦笑に、葉が笑いをこらえて肯定する。

なんとなく氣まずいものの、ジャングルジムを椅子がわりに、四人は並んで座つた。

とつぜん海斗から悲鳴があがる。

「やべー！今、携帯が変な音した！」

「なんだよ。忘れてたのかよ」

慌てて尻側のポケットに入っていた携帯を取り出せば、どのボタンを押しても画面が切り替わらない。

光がうつすらとしか届かない小学校の校庭で、目に見えてわかるくらい、海斗の顔色が変わる。

「どうしよう……絶対、怒られるんだけど」

「そりゃ、海斗が忘れてたのが悪いんだから、素直に怒られとけよ

「葉は、お母さんの怒った時のこと知らないから、簡単に言えるよな！」

「……知ってるよ。小学校、低学年の時、だつたかな。怒られたじゃん、一人で」

口をとがらせて、みたらし団子がついている串を、葉に突きつければ、葉も剣を交えるように、自分の串でそれを払った。

「そんなことしてる場合じゃないんじゃない？」

あきれた声で桜が結つてある髪の毛を気にして手をのばせば、少し離れたところから声がかけられた。

「一回、電池はずしてみろよ。ひょっとしたら直るかも」
おそるおそるかけられた声に振り向けば、五人の中の一一番背の低い少年がこちらを見ている。

「電池って？」

「おい、海斗！」

怖がるふしもなく、海斗が携帯を差し出そうとするのを葉が止めた。

今までからんできていた連中を、信用するな。とばかりに。

しかし、その少年が手をのばし、奪い取るかのように海斗の手から携帯を取り、裏のフタを開ける。

ちゃんとフタを閉め直して、海斗へと放つて、慌てて受け止めれば正常に動いていた。

「ありがとう！ でもなんで直ったんだ？」

「ぶつけたりすると、時々ずれたりするんだよ。それで直らなかつたら、ショップに行かないダメだけどな」

「そつか。助かったよ！ まじで！」

田を輝かせ、嬉しさを隠さずともせず礼を言つてくる海斗に、背

の低い少年が　とはいえ、海斗と回じくらうだが　少しつむたえた。

「……別に」

そう言って地面に座っていた少年が立ち上がる。
つられて立ち上がった仲間の四人は、一ニヤニヤと笑って少年の頭をこびりいた。

「友達になりたいんなら、はつきり言えばここのに
桜の言葉に、少年は驚いたように一度見してから叫ぶ。

「うるせー！　だれが他校のやつらとつるむかよ！」

「でも、ボクはすっげー感謝だからな。部長たちの言葉とか気にしないでいいからさ」

真樹がカメラを構えて、シャッターをきつた。白く強い光が暗闇に慣れた目を直撃する。

田を押さえて、背の低い少年がわめく。

「う、うるせー！　うるせー！」

振り向きもせず彼らは校庭から姿を消した。

海斗も機嫌よく伸びをして、帰るひと声をかける。
「やつぱり、海斗にはかなわない気がするわ

「私もそう思つた」

「……違ひないな

「な、なんでだよ？　礼を言つただけじゃんか」

眉をひそめて前髪を触れば、みんなが吹き出した。

それを横目に、さら口をとがらせる。先に歩き出せば、葉が笑いながら追いかけてくる。

「海斗くん。まじ、团子買つてやるからせー」「あひー

「いりねーよ！　もうここから、帰るつま」

「まじ、最後の一個あげるから」

桜が残り一個となつたみたらし団子を差し出せば、海斗は顔を赤くしておもわず立ち止まつた。

そんな海斗の背後で、にやりと口の端を持ち上げた葉。

「なに立ち止まつてんだよ、海斗。おまえもエロがわかつてきたなー」

「え、エロくなんかないよ！」

大声で葉につかみかかれば、たくさんの視線に気付いて顔をあげる。

くすくすと周りの見知らぬ人たちに笑われて、海斗は首まで赤く染まつた。

「ばーか！」

一声叫んで真樹の腕を引っ張り、桜は顔を赤くして海斗たちから一刻も早く立ち去ろうと下駄を鳴らした。

「自分たちだけで逃げよつたって、そつはいかないからな！ 桜、真樹！」

「ちょっと！ 名前呼ばないでよ！ 仲間だと思われるでしょ！」

葉の呼びかけに、桜が怒りの形相で悲鳴をあげる。

走りにぐい着物と下駄では、サンダルをはいていふとはいへ、ハーフパンツの彼らを振り切ることは難しい。

おかしな笑い声をあげて追いかける葉に、桜と真樹がまたしても悲鳴をあげて逃げ出す。

ぼうぜんと立ちすくんでいた海斗も、その光景にくすりと笑い、駆け出した。

(後書き)

自分の描いた祭絵に、話をつけたくなつて書いてしまいました。特に今回、教訓なるものが入つておりませんが、楽しんでいただければと思います。

* 時間シリーズとして書いた続編をまとめた、目次を作成しました。
下部『そこに在る時間』リンクから、気軽にのぞいてくださると嬉しいです。

* 光太朗様から、とても素敵な『時間シリーズ』を書いていただきました！

みんなの特徴をいかんなく發揮してくださつてます！ 嬉しくて嬉しくて～
後書きあとに、リンクを貼りましたので、ぜひぜひのぞいてみてくださいませ

二次創作、時間シリーズ（いただきもの）
・『ちよつとだけ憂鬱な時間』（光太朗様作）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2785f/>

さざめく時間

2010年10月8日14時58分発行